

☆私の意見

あじさいの心

宮崎 辰雄

△神戸市長▽



新年あけましておめでとうございます。

冬は厳しいといわれながらも瀬戸内の冬は明るく暖かです。私も今年は久方ぶりにゆとりのある正月を迎えることができます。ここ数年、神戸に大きな災害がないためだともいえますが市政が落着いてきたからでしょう。

昨年、暇をみつけて、随筆集『あじさいの心』をまとめました。何時もむずかしいことばかりいつていますが、本当は、人間味あふれた文化人？であるというイメージづくりを狙ったのですが、市政を扱ったテーマも多く、かえって「まじめ人間」の印象をひろげてしまったのではないかと悔んでいます。でも、「君に、そんな文才があるとは知らなかった」「市長さんて、案外、心根はやさしいのね」などいわれると、心よい胸の高ぶりを覚え、やっぱり苦勞して出版した甲斐があったと満足しています。

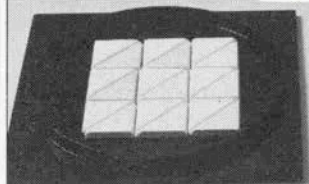
市政でも、これからはこのようなゆとりと心のふれあいを探っていくような行政をつくりあげていきたいと思っています。もちろん行政は、財政のやりくりや都市づくりへの着想が基本となります。幸い、財政は全国でも珍しい都市経営の先見性を發揮して安定していますし、都市づくりでも、「神戸のまちは、最近、緑が多く美しくなった」とよくほめられるように住みよさをそだててきました。

そのような下地の上に、手づくりの市政を心掛けていきます。市政も、子供をそだてるとか、芸術品をうみだすのと同じで、市政をあずかる人の個性が反映するといえるのではないのでしょうか。神戸市政をあずかって三十年、近ごろになって、やっと間をとって市政をみつめる余裕がどこか生れるようになりました。これも年期的なせるわざでしょうか。

市政といっても、市だけががんばっていても何もできないので、市民のみなさんの理解と協力に支えられて、はじめて「生きた」行政ができるので、私は、そのためのコンセンサスづくりに今年もじつくりと取り組みます。

寿御干菓子

新春をことほぐ新年菓
それぞれの風味も
めでたく
久しく御愛顧を
賜っております。



干支「巳」5客 ¥500

御題「海」3客 ¥800

創業80周年

神戸月堂

本社 神戸元町3丁目 ☎(078)391-2412

美術 古骨 刀剣 書画



李朝筆箱 五五〇、〇〇〇円

鑑定 買入
 刀剣研磨その他工作
 一ヵ月仕上 是非ご用命下さい

神戸市生田区元町通6丁目25番地

刀古骨 美術 鑑
元町美術
 〒650 TEL078-351-0081

□随想

イスラエルの旅

伊藤 慶之助
(作家・春陽会会員)

レバノンの国境を南に越えるとすぐイスラエルに接しているが、この国境附近にパレスティナ・ゲリラの集落があつて、たえず紛争が起きているので、レバノンからイスラエルに入国するには、ペイルートから対岸のキプロス島に渡り、船でイスラエルに入国するのが安全である。イスラエルのエルサレムはキリストの伝説ともからんで、特異な詩情をふくんだ風景である。キリストはゴルゴダの丘で磔刑になったが、その磔刑された場所に聖墳墓教会が建てられている。旧市街のはぼ中央で、このゴルゴダに登る細い小路をキリストは十字架を負わされて、あえぎあえぎ上つて来た。今「悲しみの道」として石段もそのままに残されている。

ここを東に行くと、城壁に囲ま



ビプロスにて杉村春子さんと

れたエルサレムの神域に出る。ヘロデ王の第二の神殿の遺跡もこの神域にあり、有名な「嘆きの壁」は神殿の西側の岸壁である。全てのユダヤ人がこの壁に手を触れ、この壁に涙を流すことによってエルサレムの回復を祈る場所としてユダヤ人の信仰のメッカとなっている。シャガールも、ユダヤ人として深い愛情をこめて、この嘆きの壁の前で祈る人々の姿を、油絵の大作として描いている。この神域の南の小高い丘が「シオンの山」で、キリストが使徒たちと最後の晩餐をしたのは、今、ダビデの墓といわれる小さな聖堂の二階の広間だと伝えられている。左に道をへだてて、マリアの墓という聖マリア教会があり、オリブの樹林と岩のドームのイスラム建築の円い屋根が夕陽を受けると、静かな美しい雰囲気にかまれる。

レバノンは中近東では唯一の通貨自由国で、金融制度が発達しペイルートには西欧諸国、アラブ、東洋、アメリカの商社が軒をならべている。ソニーのネオン

塔も町のあちこちで目につく。海岸には近代建築のアバートやアラブ石油の成金の別荘がたちならんでいる。ペイルートの北郊、地中海に張り出した岬に小モナコの雰囲気のカジノがあるので、杉村春子さんを誘って一かく千金を夢みて出かけたが、ルーレットには手を出さずにフレンチ・カンカンのショーを見てホテルに帰った。

カジノから海岸を少し走ると、ジェベイルという小さな村があり甘いオレングの産地として知られている。古代ビプロスと称され、七〇〇〇年前の住居跡が最近発掘されて世界の話題となっている。

紀元前三〇〇〇年にはイシス神を祀った神殿、城門などが建設されており、ローマ、ビザンチン、十字軍の諸遺跡も発掘されている。

ペイルートからレバノン山脈を東に向って入ると、パールベツクの遺跡がある。紀元二世紀から五世紀頃の遺跡であるが、復旧されたバツカスの神殿、青空にくっきり浮き出したジュピター神殿のコリント式列柱など、美しいマツスの風景が見事である。このフェニキアでは、農作物の豊作を祈る行事として町の娘を一週間ほど神殿に座らせ、男性に処女を開放させる法律をつくつて、古代亮春国家の汚名をきせられ、ローマ法王からも再度禁止の命を受けている。

□随想

スリランカの旅

川瀬 喜代子
(にしむら珈琲社長)

スリランカという国ご存知ですか？ セイロン紅茶で知られているインド洋に浮ぶ夢の島宝石の島と観光案内では詠われています。私達は紅茶視察団として十一月九日、秋寒い日本を発ち約十三時間後、灼熱のスリランカの首都コロンボに到着しました。

翌朝早くスリランカの中央部にあるキャンティへ出発。この街は西欧の支配に最後まで抵抗したシンパリー王の本拠だった所で、釈迦の歯を記した寺院があり、仏教の中心地として伝統の美しさの滲んだこの旅行の中で一番印象深い美しい町でした。この町で紅茶工場見学、買付けと旅行の目的も果たして、更に奥地のシギリヤへ。とにかくその後アスタラプーラ、ウイパトウ、ネコンボとスリランカを半周したのですが、その間ただただ椰子の林だけ。何ひとつない単調な景色。時々道に出ている掘立小屋で椰子の実を買い、汁を廻し飲みしたり、モンキーバナナを食べたり、トイレ休憩もままならずにバスはひたすら走るのみ。その単調な景色の中に突然ギョッとするような巨岩が遙かに聳えていました。それがシギリヤのライオンロックです。五世紀に戦乱を逃

れた王が隠家とした所で、遙か百八十三メートルの頂上の洞窟に故郷の王妃や王女を偲んで書いた壁画が千五百年たった今日、色鮮やかに残っているのを見た時は、何だかタイムカプセルに乗って千五百年前に返ったよう。心臓が破裂しそうな思いで若い人に負けるものかと登った甲斐がありました。



キャンティでの筆者

アスタラプーラで一泊しましたが、ここはマラリヤの危険があり日本から持参の蚊取線香の煙にむせびながら一夜をあかしました。翌日、楽しみにしていたウイパトウの自然動物園へ。バスからオンボロジープに乗り替え、振り落されないよう必死にしがみつきたがら、豹はどこ、象はどこと目を

皿のようにして走った五時間はさすがに皆ぐったり。一同よほど猛獣にこわがられたのか、一向に大物は姿をみせず期待はずれの日でした。

この旅行で一番美しいといわれていた印度洋に面したネコンボは夜遅くつき、早朝出発、振り出しのコロンボに帰り、いよいよ女性の一番の関心事。宝石店を訪れ、素晴らしいキヤッツアイ、ブルーサファイア、ルビーなど、どこのトップレディの胸を飾るのかと、目のお正月をして溜息をつきながら表に出ると、また裸足の子供たちがワーツと寄ってきて、口々にボールペン、ライターと叫びながら取り囲む。抱かれた赤ん坊は皆丸裸。それでも彫りの深い美しい顔や純朴な瞳、無心に赤ん坊までも手を差し伸べている姿を見ると、日本の子供達の顔を思い浮べて思わず涙がにじみます。美しい宝石とこの子供達、何とも割り切れない気持ちです。私のこの旅行の一番の目的であるカプチノコヒーに入れるシナモンスティック（ベトナム戦以来日本で手にはいかなかった）の個人契約も無事済せて目的は果されましたが、それにもましてこの国の実情を見、いかに日本が総てに恵まれ幸せかを、しみじみと日本の有難さを感謝した事です。

□ 随想

文豪「鲁迅」

陳 徳 仁

(神戸華僑総会文化部長)



待ち兼ねていた「鲁迅展」が、
いよいよ一月十四日より神戸そご
うで開かれることになった。

思えば昭和四十一年の五月「紅
樓夢展」が中華人民共和国の出版
で大阪そごうで開かれたが、「紅
樓夢」が出現したのは十八世紀の
中葉、中国王朝最後の清朝の最盛
期とも言われた乾隆年間だった。
物語りは貴公子賈宝玉と美女林黛
玉の悲恋を中心に、貴族の盛衰を
叙した長篇小説ではあったが、出
展者はこれを絵物語りに要領よく
纏め、参観者が絵と文を追って歩
いているうちに当時の貴族達が使
用した豪華奢侈な衣裳や日用品、

そして当時がありがちな身売り契
約書、科挙(中国の封建時代に行
われた官吏登用試験)の試験日に
カンニングのために着用していた
肌着(四書・五経等の重要なこと
ろを白布の肌着に書き写してある
もの)等々、現代から見ると珍奇
なものではあるが、私はなんとも
いえない苦痛を胸に感じつつ見終
ったことを覚えている。

かくして、この「紅樓夢」展は
参観者の受取り方こそ違うが、非
常に充実した展示会であったので
参観者をして大いに学び得たとい
うことでは大成功だったと思う。

だが、このたび開かれんとして
いる「鲁迅展」は、中国人、日本
人を問わず、きつと少なからずの
感銘を参観者に与えると思う。

なぜなら、鲁迅こそかつては日
本に留学した、近代中国の生んだ

憂国愛民の志士、偉大なる中国の
文学者である。そして、毛主席が
中華人民共和国を樹立した大政治
家であるように、鲁迅はその原動
力となった中国人民の魂を育てた
精神の改革者であるからである。

かつて宋慶齡(孫中山先生夫人
・中華人民共和国副主席)が、魯
迅の「阿Q正伝」を読んだとき、
涙が止まらなかったと言うが、そ
れは宋慶齡が阿Qという一人の人
物の中に中国民族の悲哀と悲運を
見出したからである。この憐れ
な阿Qこそ、中国二千年来の陋習
を身につけた中国の多数の労働大
衆であり、多年來、権力者や搾取
階級に虐げられそれに屈服し、卑
屈になることが生きるための唯一
の道だと思い込み、人間であって
人間でない人間になりつつあった
からである。

鲁迅が仙台の医学専門学校で見
た幻灯に写しだされた哀れな同胞
も、実は阿Qであったのだ。ここ
で鲁迅は初めてメスをペンに換え
肉体の医者になるよりも、魂の医
者にならんと決心した。

鲁迅の全てを知るためには鲁迅
全集を読破してもそれは不可能だ
ろう。だが、現代の中国を知るた
めにも鲁迅を知ることが大切だ
と思う。この観点からしても神戸の
鲁迅展は神戸市民や華僑にとつて
も大きな意義がある。



1936年の鲁迅

□ある集いその足あと

木彩会

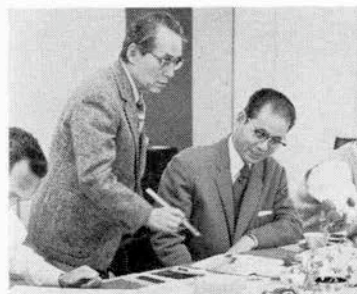
遊心会

昭和三十四年七月から毎月二回
木曜日の午後二時から、日本画家
山本大慈さんの指導のもとに「日
本画を習う会」を開いている――
と、昭和三十四年の「神戸商工会
議所報」にある。

この木彩会発足当時の会員十三
名。神戸商工会議所議員及びロー
タリー議員有志によるメンバー
で構成され、まだ木彩会の名前は
なかった。

昭和四十六年の「神戸商工だ
より」に「木彩会のこと」として山
本大慈さんの稿がある。少し引用
してみると――

「絵を習いたい希望者を集めるか
ら指導の方を引き受けてくれない
かとの話が、故人となった久保佐
一さんからあったのは随分前のこ
とで、十二、三年にもなりまし
うか。金井前知事がまだ副知事時
代で、しばらく参加しておられま
した。（中略）みな勝手な絵を描
いて楽しんでおられます。（中略）
上手、下手は問題でなく、仲々面
白い絵ができます。上手に描こう



左が指導する山本大慈さん（木彩会）



第6回木彩会・遊心会日本画展（国際会館）



山本大慈さん宅に集う遊心会のメンバー

として手本そのままのものを描こ
うとするからやりにくいので、自
分の見たまま、感じたまま、巧拙
を問題とせずに描くところにアマ
チュアとしての面白さが発揮でき
るものです。忙中閑、ひと時を何
事も忘れ、絵筆に遊ばれるのもま
た楽しいことと思います」

こんな姿勢で指導する山本大慈
さんを師とするもう一つの集いが
遊心会であり、現在のメンバーは
二十名。女性ばかり。山本大慈さ
んのアトリエに月二回通ってくる
わけだが、とっても和気あいあい
な雰囲気。

木彩会・遊心会ともに各メンバ
ーが立派な画帖をもっている。そ
の画帖に山本さんが月に一枚ずつ
手本を描く。それが楽しみのひと
つでもあるようだ。師を同じくす
る二つの日本画を習う集いが、昭
和四十六年に初めての展覧会を生
田神社えびら会館で開催した。そ
れから昨年の十一月で六回目。絵
の出来映えは毎年成長する。七夕
のようにして年に一度出会う二つ
の集いが互いに批評し合いながら
山本大慈さんのいう各人の持ち味
を生かした絵ができあがっていく
のである。

木彩会 井合区浜辺通五丁目一―一四
神戸商工会議所内 電話二五―一〇〇一
遊心会 東灘区住吉町赤塚山一八七―
山本大慈方 電話八一―一七二六

謹賀新年

今年もどうぞよろしく

昭和52年元旦

●ビスケット

¥700・¥1,000・¥1,200・¥1,500・¥2,000・¥2,500・¥3,000



ユーハイムのお菓子は、純正材料をたっぷり使い、それぞれの持ち味を生かして作られています。お子さまはもちろん、味にうるさいパパにも、そのおいさがよろこばれています。



本 店 神戸市生田区下山手通2-31 TEL (078)331-1694
三 宮 店 神戸市生田区三宮町3-15 TEL (078)331-2101
さんちか店 神戸市生田区三宮町1-1 TEL (078)391-3539

MAKE UP WITH ROYAL

頌 春

欧州からやってきた
世界の逸品を取り揃えて
お待ち申し上げております



神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎ (321) 1212代表
新年は6日より営業致します。毎水曜定休。
三宮店・さんちかタウン ☎ (391) 1874~5
正月は1・2・18・19日が休みです。

□新春ずいそう

新しい豊かさを求めて

坂井 時忠 〈兵庫県知事〉

え・伊藤慶之助

去年の正月であった。

各新聞の論調は一斉に「戦後止まることを知らなかった高度経済成長は、豊かな物質生活をもたらしたものの、その反面人間の精神にかかわる問題ではさまざまなかげりや弱点をさらけ出した。いまこそ真のしあわせの何たるかを問い直し、新しい価値観に支えられた人間社会を創らねばならぬ」と書きたてた。

そして二年。「物から心へ」、「量から質へ」の転換は、流行語のようにさえいわれたが、果して世の中はそう変っただろうか。いや、今日の低迷

つづける不況風の中では、むしろ金と物にからむ欲望はかえってついついていくうらみさえするのである。

この際、もう一度お互い自らのくらしの中に思いをいたし、いち早く過去の生活軌道を修正し、新しい社会づくりを急がないと、もはや取り返しがつかなくなるのではなからうか。これは単なるお説教や精神訓話ではなく、人間の生死が問われている生々しい問題として自覚することが必要である。

私はそんな思いを強くするがゆえに、昨年初、



県行政全般を文化的視野から見直し、県民一人ひとりの生活向上を精神文化の充実に求めようと文化局を発足させた。

その発足にあたって、国立民族学博物館長である梅棹先生ほか十数人の専門家の方がたからご意見を伺ったが、いずれも「文化行政は遊びの行政であったり、余力があればやるといったはみ出し行政ではない。文化行政こそ今日的な、しかも行政全般の基盤となるべきものでなければならぬ」とのことであった。

しかし、今日でも巷間には文化行政なんてぜいたくで優雅な行政だという批判の声を聞く。これは文化というと、ヒマや金がかかるもの、すぐれた芸能を見たり聞いたりすることくらいに受け取られ、私たちの生活には縁遠いものだとする考え方がまだまだ多いからではなからうか。文化に対する考え方が、そんな次元で論議されるかぎり、文化社会への道は日暮れてなお道遠しの感を深くせずにはいられないのである。

文化を英語でカルチャアという。その語源は「耕す」とあるように、自らが心の土壌を耕すという意味では、文化は自らが行う精神開発であり、また、私たちの住んでいる郷土の土や水や空気——そのおかれた生活環境の中での人間の生き方そのものでもあるといえよう。従って文化は、県民の自主性によってのみ高められるものであって、行政はそのお手伝いの役目でしかないと思得ている。

しかし行政自らもあらゆる施策を文化的視野に立って見直し、従来ややもすれば機能性や合理性重点の姿勢から地域性や芸術性を考え、心あたた

かい人間社会をつくることに努力せねばならないと痛感している。

ところで昭和五十二年度は、自立と連帯による生活文化社会実現への実践活動を活発にすすめたいと考えている。

これは一昨年策定した「二十一世紀への生活文化社会計画」を生活のなかの身近な問題としてとらえ、その一つひとつを県民参加によって実り多いものにしていくこうとするものである。と同時に、昨年実施した「県民会議」や「緑の回廊の祭典」などを通じて芽生えはじめてきた「自立と連帯」の精神をさらにひろげ、行動に移そうとするものである。

それはひとつには、県下各地域におけるすぐれた文化土壌を掘りおこし、これを育て、創造していくなかで、心豊かな人間性や風土環境をつくろうとする「ふるさとの文化運動」であり、また衣食住など、家庭生活そのものの見直しのなかで新たな豊かさを発見しようとする「くらしの文化運動」でもある。

さらにトリム健民運動や健康のカギ運動などこの際総合化して、心身ともに健やかな県民運動として推進したいものと願っている。

どうか大方のご意見やご批判、さらには一層のご協力を賜れば幸いである。



坂井 時忠

活動狂

原

清

〈朝日放送社長〉



五十数年前に活動狂たちが出していた映画雑誌
上左から「ファン」(大正11年7月)、「スクリーン・ファン」(大正12年8月)、「映画」
(大正12年12月)、下は「セルロイド・プレイ」
(大正12年12月)

私は活動狂だった。仲間も多かった。もともと活動狂といっても、当節はよりのヘルメットや鉄パイプで暴れまわる活動家とは全然違う。大正から昭和のはじめにかけて、映画を愛し映画を中心に自分の生活を回転させていた連中のことを活動写真狂、略して活動狂といった。

なにしろ当時の日本では、まだ映画は必ずしも健全娯楽として認められていなかった。ほとんどの中学校、女学校では映画館への出入りは禁止され、場内の客席も男、女席が分けられていた。不良青少年が出たり、泥棒が捕えられると、きまつたように新聞は「活動写真を見て墮落し……」という本人たちの自白をのせた。

そんな時代に、ひたむきに映画を愛好し、映画芸術を論じ、映画事業の向上発展を討論する活動狂グループがいたのだから、今から思えば、むしろ痛々しいまでに純情で愉快な仲間たちだった。もともと、この活動狂グループも、大きく分けると、アマチュアとプロフェッショナルの二つに分けられた。

アマチュア活動狂は、映画の魅力にとりつかれて毎週何回か映画館に通いつめる生粋の活動狂。それは学生もあればサラリーマンもあり、いずれも身ゼニを切って映画を観る、その批評や感想文を新聞や映画雑誌に投書する。それが高じてくると、自ら同好の士を集めてファン・グループを作り騰写版刷りや石版刷りの映画雑誌を発行した。写真版など手がとどかないので、器用な同人が俳優の似顔絵など描いて表紙を飾ったのもあった。

それが活版刷り出来るように成長でもすると、もうひとかどの活動狂。もともとがアマチュアだ

けに誰れも遠慮のいらぬ言いたい放題。まだ、は
たちにもならぬ青二才が、ときに世界的大プロデ
ューサー、セシル・B・デミルをコキ下ろし、と
きに天下の名女優グレンタ・ガルボに毒つくかと思
うと、また名花クララ・ボウに、まるでわが恋人
さながら齒の浮くような讃辞をならべ立てて得意
がったものである。

さて、そこで、この愛すべき活動狂の仲間の顔
ぶれだが、まず神戸を中心のアマチュアだけにし
れば、その筆頭は当時の神戸市立図書館司書橋
元正一、貿易商社員喜田一雄、詩人能登秀夫、外
国銀行職員岡田鈴石、印刷所工員栗林紅路、中学
生の水野溪水、関西学院英文学部の学生だった村
上久雄、同中学部生徒宮森喜久二、そして私も甲
陽中学生ながらペンネーム紀夜詩の名前で参加し
ていた。後にプロフェッショナルに転向していっ
た筈見恒夫（本名、松本英一）も昭和二年から三
年ほど我らの仲間に入っていた。

このほか映画館や映画雑誌社に勤めてはいるも
の、映画愛好の集いには必ず一ファンとして参
集するセミプロまたはプロの活動狂については後
述するが、生粋のアマチュア活動狂のリーダー格
は橋元、喜田の両名だった。

橋元正一は、さすが図書館司書だけあって博覧
強記、何でも知らぬ事なしといわれるくらいの知
識の持ち主だった。たとえ、その場で十分な答え
が出ないことがあっても、お手のものの図書館資
料で調べ上げて、たちまち正解を持ってくる早業
には一同舌をまいたものである。

喜田一雄は貿易商社勤めの忙務の中で、よく映
画を観、音楽会にもよく顔を見せた。直情径行、

丸い運動場も四角に歩くといわれたほど几帳面な
性格だけに映画評論も理詰めできびしかった。昭
和三年「文芸公論」三月号に載ったある映画評論
家の一文に対し憤然、彼は「アメリカ映画は果し
て墮落したか」という反論を「映画邪道」誌に掲
載した。この反論はマキアベリーやニーチェから
はじまり米国社会のデモクラシー、ブルジョアジ
ーに言及するという六〇〇〇字を超える大論文で
話題をまいた。

これら活動狂花やかなりしころから既に五十余
年、もちろん当時の青少年たちも老境に入り橋元、
喜田の両人は亡くなったが、変らぬ活動をつづけ
ている一人に詩人の能登秀夫がある。彼は当時鉄
道局職員だったが無類の映画好き、とくにアペル
・ガンスの「鉄路の白ばら」はじめ「心なき女性」
「血と砂」など文芸作品の分析批評は他の追隨を
許さなかった。

彼は今もなお元気に詩道に専念、同人二十人と
共に月刊詩誌「浮標」を発行、その編集長兼世話
人として走り廻っているが、近作（七十六年三月）
にこんながある。

元旦

首をさすつたら

首はあった

来る日

来る日が勝負の六十九才

はや三カ月

まだ生きていられるのが

嬉しい

（以下略）

大声の旅人迎へ。

丸谷 才一・赤尾 兜子・陳 舜臣

〈作

家〉

〈俳

人〉

〈作

家〉



昨年十一月九日、小学館主催の文化講演会で芥川賞作家の丸谷才一さんが来神。「日本語を生きる」を講演。

——二十数年前、国語改革が行われた。新カナづかいや漢字制限を軸として国語規制をした。ところが今、その弊害が現われ、現代の日本語のあり方が問われている。それが現代の日本語ブームを生んでいると思う。(漢字がなくて子供の名前がつけられないこと、ローマ字の使用がやたら多いことなど例をあげ)元来、言葉は歴史的な継続の中でこそ意味を持つ……。現代の日本語は、非論理的で醜悪で冷たくギスギスしている。今の日本語はいやだと思う。しかし、使わないわけにはいかない。使いながら、きれいな日本語を、美しくて機能的な強いものにしていかなければならない。難しくてつらいことだが一国民の言語生活だということを考えると、やりがいのあることだと思う。——

大きな声の丸谷さんは、今日の日本語のあり方に対しての文部省批判になるとさらに声を張り上げる。そんな丸谷さんと旧知の仲、昨年「敦煌の旅」で大仏次郎賞を受賞した陳舜臣さんと、俳人の赤尾兜子さんと三人で座談会を企画、大いに談笑していただいた。

★B29の爆音にも負けない大声で

赤尾 丸谷さんの声は大きいから、今日の講演会場だった農業会館だとマイクはいらないでしょう。

丸谷 文壇三大音の一人、なんていわれましてね。

赤尾 声は桐朋学園で磨いてあるんですよ。

陳 他の大声は開高健さんと井上光晴さん。で、開高さんいわく「俺の声はメロディアスだけど、丸谷さんのはノイジーだ。できの悪い生徒をどなった声だ」って言ってましたよ。

丸谷 いっだったかイギリスの女流作家のアイリス・マードックという人が、ベイリーっていう偉い学者のご主人と一緒に来日しましてね、その時、彼ら夫妻と野間宏さんと私と、四人で座談会をやったんですよ。いろいろ難かしい、易しい文学論をひとしきりやった後で、野間さんが三大音の話を始めた。丸谷は日本三大音の一人である、というような話をして、それであと二人は誰と誰とであって、この三人は全く同じ世代であって、戦争中に少年時代を迎えた。つまり彼らは、少年時代、B 29が爆弾を落とす、その爆音にさからいながら、友だちと文学と人生について語りあっていた。話をするには爆音に打ち勝たなければならなかったので声が大きくなったのである、というようなことをあの重厚な野間さんが語った。通訳の女性が横にいたんだけど、あまりバカバカしい話なので通訳しようとしな。すると野間さんが、通訳しろ、通訳しろと催促するんです。彼女は仕方ないから、日本の文学者の名譽のためにならないとは思いつながら通訳したんです。そしたらマードックとベイリーは喜びましてね。野間さんがその日に話したなかで一番に受けたのがこの話でした（笑）。B 29以上の声を張り上げて文学と人生を論じるなんて大げさでバカバカしくてイギリス人が好むユーモアのあり方なんですな。

陳 前に講演会で開高健さんと田辺聖子さんと三人で九州へ行った時、田辺さんの声は小さいでしょ、だから後ろの方の人が手を上げて「聞こえませんか」っていうと、田辺さんは「前の方が空いてるからいらっしやい」。その後で開高さんが出て来て大きな声で……（笑）

丸谷 たいへんだな、講演会へ行って聞く方も。耳を澄ませる澄ませ方の調節がたいへんむづかしい（笑）。

田辺聖子さんはね、何とかいう小説で私の生れた町、

山形県の鶴岡のことをお書きになりましたね。人妻がよるめきの恋愛をして、男と二人で旅行に出て東北へ行く。そして偶然に降りた町が鶴岡というひなびた城下町で、この町が実にいい。そこでいろいろ遊んで……っていう小説だね。朝日新聞に連載の小説でして、やたらに鶴岡の町を褒めるんですよ。朝日新聞の学芸部はその原稿を受けとった時、これだけ褒められたら山形県の鶴岡って町は田辺さんの銅像を建てるにちがいないと思った。掲載されたらたいへんな騒ぎになり、お札の手紙が朝日新聞あてに殺到するんじゃないだろうかと評判したんだそうです。ところが感謝状は一通も来ない（笑）。朝日の学芸部がおかしいなって思っているとハガキが一通来てそれには「せつかくの静かな城下町があの小説のせいで観光客が多くなって騒がしくなると困る」と書いてある。朝日新聞の学芸部の記者が僕にいました。「やはり丸谷さんの生れた町は変わってますねえ」（笑）

ところがそれからしばらくして、市政三十年とかで、田辺聖子さんと直木賞作家の藤沢周平さん、彼も鶴岡の出身なんです。三人で講演をたのまれました。鶴岡で喋ったんですが、田辺さんは大変な人気でした。心では感謝していいながら、感謝状は出さないっていうのが私の生れた町の気質なんです（笑）。

陳 東北の人は本当に反応をみせないね。今東光さんと新田次郎さんと三人で講演会に行った時、新田さんは持ち時間の半分喋って半分は質問に答えるってふうにしてたんだけど、いくらしても質問がない。全然反応がないんだけど、やっぱり今東光さんはえらいですね、笑わせてるもの。

丸谷 東北で人を笑わせたらそりやえらいですよ。僕はいつだったか八戸に講演に行った時、ちょうど立教大学の英文科の助教授が女の子を殺した事件の直後で、その講演会の司会者が「国学院大学で助教授として長く英語を教えられ……」って私のことを紹介しましてね、そこで僕が出ていって「先程、国学院大学で長く英語の助教



陳 舜臣さん

いぶんちがいますね。もともと、どうも僕は人見知りするたちなんです。陳さんとは昔からお近づいただいてるし、最初から話し易かったせいがあるって、こういうふうに楽に話できるんですがね。実は人見知りするんです(笑)。

陳 あ、そうですか。

丸谷 懐疑的な口調だな。そうなんですよ(笑)。

陳 はにかみやや……開高さんだったかなあ……。

丸谷 開高さんが果してはにかみやであるか……いや、そうかもしれませんね。

陳 彼はね、講演の前になると下痢をするんです。神経性の。

丸谷 たしかにはにかむことがひどいのかもしれない。そのかわり充分にはにかんだ後のひらきなおりがまたひどいよね(笑)。だから、一般に、ちよっとお酒を飲んでから講演ってのがいいですね。

陳 そうですね。あんまり飲みすぎるといけないですけどね。

丸谷 全くの素面での講演ってのは僕はつらいなあ。座談会や対談もそうですけどね。

陳 野坂さんはだいたい酔ってるね。

丸谷 彼はもう、強いもんねえ。僕が水割りで飲むところを、彼はオンザロックをダブルで飲むでしょ。ちがいますよね。

陳 野坂さんと東北へ講演に行った時ね。井上ひさしさんの三人で。ちよっと井上さんの失踪事件の直後でね、上野で汽車に乗った時から食堂車で井上さんを慰めるわけ。

丸谷 井上さんは飲まないでしょ。

陳 ちよっと飲みましたよ。三沢に着くまでに二杯ぐら

授を勤めたというご紹介でしたが、私は不幸にして遂に一人も女子学生を殺しませんでした」って始めたんです。ところが満場シーンとしてる(爆笑)。その時の具合の悪いこと(笑)。

陳 やっぱり笑いがあって、タイミングをとって次をいうんだから、そのタイミングで笑いがなかったらたまらんわけですよ。

丸谷 劈頭のぶっつけ方としてはうまいことをいったと思っただけだね。全然ダメでしたね(笑)。

陳 さんは講演で何をお話なさるんですか。

陳 いやまあたいしたことは……。この頃は旅行談ですね。中国へ行った話。旅に想うって主題でね。昨年は中国へ行ってない。ところが中国へ行って、帰ってきてから帰国談としての講演の予定もあったんですけど、地震があつて行けなかった。その予定してた講演会では始めに「実は今日の講演は中国へ行っての帰国談というはずでしたのですが……」っていうと笑いがあるんですね。やっぱり笑い声ってのは話のつなぎになりますね。

丸谷 そうそう。やはり、講演ってのは座談の大仕掛けなものとみえなところがあるでしょ。だからお互いに親密感があつて講演するのと、なくて講演するのではず



丸谷才一さん

い。

丸谷 ウイスキーを二杯とは彼としてはたいへんなことですよ。

陳 こっちはいくら飲んだかわからん(笑)。

丸谷 慰められる方よりも慰める方が積極的に飲まないよね(笑)。

陳 ちょうどあの時の講演の順番がね、井上さんは地元であり、失踪の後だからスターでね(笑)、そして野坂さんは唄うし、というわけでこの二人が終わって僕がトリだとみんな帰ってしまうので、僕は真中にはさんでくれているって、そうしたんです。はじめは年令の順だから僕が最後になるんだっていうので、「いや、それはひどいよ。野坂さんの唄を聞いて井上さんの顔を見たら、みんな帰ってしまっていないかなる」っていつて真中に入れてもらった。

丸谷 僕も一番最後にやるのってきらいなんです。ほら五木寛之さんの顔をみたらみんな帰ってしまうなんてことがあるでしょ。

陳 五木さんと一緒に時は困るね。

丸谷 非常に残酷だよな、我々に対して(笑)。我々のような思いを五木さんに味わせる新進作家が早く出てこ

なくちゃいけない(笑)……不公平だよ(笑)。

赤尾 僕が一昨年病気をしていた時、五木さんが取材の關係もあって僕の家に来てくれたんです。その時、僕は彼と二階で話をしてて、家内は一緒にいなかったんですが、彼が帰った後で「五木さんって素敵な人だと聞いてはいたけれど、あんなに素晴らしい男が日本にいたなんてしなかった」なんていいました。

丸谷 困るね。

赤尾 それから四、五回いわれましたよ。

丸谷 不愉快な話になってきたな(笑)。……陳さんの分も僕が代弁したんだけど(笑)。

赤尾 それからしばらくして、五木さんが新聞の随筆に髪を長い間洗わないって書いています。これを読むと普通なら五木さんのことを失望するんだけど、家内は「どうして五木さんはあんなことを書いたんだろうか。あれは惜しいことを書いてしまっている」ってまだ弁護している(笑)。

丸谷 かなり恨みは深いね。そこで俳句は作らなかったんですか。その事件のショックで。

赤尾 これは散文的次元ですね(笑)。こんな時僕は、句はできませんね。

丸谷 散文的とお考えになったのは
巧妙な処理ですね。

★芭蕉は相当な田舎者

赤尾 私が青春時代初めて文学に魅かれたのは横光利一からなんです。たくさん全集が出るこの頃、横光利一の全集が出ていないし、伊賀の出身であることも、俳句のことも知ってるんだけど、私が関心を持ってるのは、丸谷さんが山形県の出身であるということと何か関連があるよう

な気がするということなんです。

丸谷 横光利一の奥さんは私が生れた町、鶴岡の生れです。そのせいでしょうね、家に本があった。地方の医者の家ですから、その町のちよとした家の娘が一流作家の奥さんになったりすれば少しはその作家の本を買うでしょ。私の家は決して文学的な家ではないんだけど、たとえば『寝園』とか『春園』とか『機械』、それから『書き方草子』なんていう本がありました。それぐらいしかなかったみたいです。つまり夏目漱石以後の日本の小説家の本で家にあったのは横光利一。他には林美枝子がありましたね。

陳 よく覚えてるね。

丸谷 『放浪記』と『三等旅行記』ってのがありました。それは僕の姉が買ったんだろうと思うんですが、横光利一もそうかもしれません。そんなわけで家族が関心を持つようになるんですね。それで私も横光利一って小説家に関心がありました。それに、今でも僕はやはり注目すべき小説家だと思います。殊に『上海』と『寝園』がいいんじゃないですか。それと『家族会議』って小説。『日輪』なんかもおもしろいと思います。

陳 上海のストライキを描いた場面はちよとした筆ですね。

丸谷 やはりそうですか。私はね、上海の実体とかあの事件の、オリジナルであるところの上海を見たこともないのでわからないのですけれど、陳さん、『上海』はお読みになっておもしろいですか。

陳 あのストライキの場面はすごいと思いましたね。

丸谷 上海としてはおかしくないんですか。

陳 全体としてはちよとね。だけどディテールで完成しましたよ。

丸谷 歴史を捉える力はちよと弱いかもしれないって感じはあるんですが。

赤尾 これは丸谷さんに対しては暴論かもしれませんが、芭蕉と丸谷さんの横光利一との出会いを聞きましたが、芭蕉との比較でね、芭蕉ってのは、僕、今見る限りでは簡単にいいますと相当な田舎者ですね。もちろん文学者として、俳句としてのレベルは実に高いところにまで高めましたので、僕はあれで俳句の形というものをほとんど作ってしまったとは思いますが。しかし、芭蕉というおっさんはね、田舎者のおいが芭蕉を全部読むとあります。丸谷さんは東北の出身

ですよ。僕は実は、東北は東京より北へは行ったことがないんです。だから僕にとっては外国に近いんです。だが、横光利一も、一方ではたいへんなモダニストであっても、モダニズムは表現の問題でして、やはり根は相当な田舎者という感じがするんですよ。

丸谷 私のことはわからないですけどね。モダニズム文学というものは日本では都会出身者によつては為されなかったという面はありますね。例えば、堀口大学が越後の出身、西

赤尾兜子さん



脳順三郎もやはり越後、要するに昭和初年のモダニズム文学ってのはこの二人でしてね。新潟を東北に入れてしまふのはおかしいにしても、東北にほぼ近い。で、この二人のことからいっても、新潟県のある町から東京を経ないでいきなりパリとかロンドンとかに行ってしまうという傾向があるんですね。つまり右大臣実朝が一度も京都に行ったことがなくて、いきなり宋へ行く船を作ったという心理に似たものが地方在住の文学者にはある。その心理はごく普通のことじゃないでしょうか。

赤尾 萩原湖太郎と室生犀星とが会いますね。これだつていわだ地方人の出会いですよ。

丸谷 泉鏡花のたいへんな江戸趣味ってのは、要するに金沢に住んで、雪の中で考えた江戸なわけなんですよね。あんな芸者というのは実際には一人として東京にはいなかった(笑)。

陳 僕は昨年敦煌へ行つてね。そこには三十五メートルの弥勒菩薩像があるんですね。奈良の大仏の二倍です。奈良とか敦煌とか、またバーミアンには五十三メートルの石仏があつて、みんな田舎で作ってるんですね。ところが当時の世界の中心である長安にはそんな大きな大仏はないんです。

丸谷 あつ、ないんですか。それはおもしろいな。

陳 あんなデッカイのは作っていない。

丸谷 文明の意志ってそんなものですね。これは非常におもしろいな。

★ただどやっばり芭蕉ってのは大きいですよ

丸谷 安東次男さんが歴程賞を受賞をしましてね、そのお祝いの会をやったんです。石川淳さんと大岡信さんと私と四人でやりまして、発句が正客ですから安東次男で「火祭りも済んだる秋の藪を煮る」

赤尾 なかなか手の込んだ句ですね。

丸谷 受賞式が終わったんで原稿を書いてる句じゃない

ですか(笑)。

赤尾 今の解釈は……(笑) 藪を煮るをそういう風に解釈しますか。僕はかなり抽象的なほうへもつていこうとしていましたからね。安東次男さんはあんまり抽象的な俳句はやらない人ですが……。

丸谷 僕はそういう風に解釈してつけたんです。「花野を帰る河内あきんど」。

赤尾 僕もこんど東京に行ったらその連句の仲間に入れてもらいたいですな。

丸谷 何度もやってるんですけど、その時は二時から始めて六時くらいまでに十二句。

赤尾 流火宗匠(安東次男)はきついでしょ。

丸谷 僕のつけた句にはむやみにきつくつてね(笑)。

赤尾 僕は安東次男さんは俳人として、俳文学を含めてこわい人の一人ですね。

陳 俳人というのは俳諧的生活をしないといけないですね。

赤尾 そこまでいわれれば、そこまでしなければいけないんです(笑)。

丸谷 文士的生活ってのは型が決まらないし、理想がないけど、俳人というのは理想がありますよね。つまり偉い人がちゃんとつきり一人いるんだもの。

赤尾 芭蕉という典型が見事にいます。

丸谷 ああいう人が一人いると、楽つていえば楽だけれど、こわいつていえばこわいですね。

赤尾 僕なんか楽どころか、こわいというか、たまらんです。だから芭蕉を田舎者だといいたくなるんです。「五月雨を集めて早し最上川」って句があります。あれはやつぱり現地に行かないことにはわからないです。

丸谷 そんなこと、ないでしょう。僕は最上川の本流のほとりで生れたのではなくて、支流の方だからあんまり本流の方は知らないんです。最上川で思い出したけど、最上川を詠んだ歌のなかで僕が一番感心したのは、今の

天皇が山形県を旅した時の歌で「広きの流れゆけども最上川 海に入るまでにこらざりけり」。僕はこれはいい歌だと思ったら折口信夫さんが絶讃してるんです。たしかにいいと思う。つまり国ほめの歌なんですがね、いかにも国ほめの歌らしくゆったりとした調子があつてね、大味でめでたいといえぬでたい。普通の人間では詠めない。この歌のそばにおくと茂吉の歌ですらんだか小さいって感じがしてしまふんですよ。この間「日本文学史はやわかり」っていうのを天皇の歌を中心にして書いてたんですけど、和歌ってものは天皇が詠んだ時が一番良くなるってことがあると思うんです。後鳥羽院が歌を詠む、同じ調子で同じところをねらって、当代随一の歌の名手藤原定家が歌を詠む。もちろん藤原定家の方がうまい。うまいけれどもなんだかひとつガラが小さくなる。そこところに気がついた人がいて、それではどうするかって考えた時に発句ってのが生れたんじゃないかと思う(笑)。これなら天皇には詠めない。天皇をしのぐことができるものってのを芭蕉が考えたのではないかと思うんですけどね。たとえば加賀の国で曽良が句を詠んだら、芭蕉がその句が小さいって叱るんですね。大国には大国のふうがあるって。加賀の国は大国なんだから大国にふさわしい句を詠めってね。そういうことを芭蕉ってのは、私がさっきいったようなことを考えていたんじゃないかという気がするんですね。だから「荒海や佐渡によこたふ天の川」って句が詠めるんだと思うんですよ。

★小説家は憶面もなく恋の句が

赤尾 芭蕉は中国の杜甫の詠みにたいへん力を入れ、尊敬もしている形跡がありますね。杜甫は何といつてもガラが大きいですからね。そのガラが芭蕉にたいへん影響したみたいですね。

ローのつけは良かった。

丸谷 ああ、あれね。あれは表の六句がすこぶるもつともらしく続いてきましてね、その六句目が「ひくにひかれぬ邯鄲の脚」っていう石川淳さんの句で、これはなかなかしゃれてるんですが、それでもむずかしい。そこを一つ、景気よく羽目をはずそうという心だったんです。で、第六句を東京に出てきてしがない暮しを送っている文学青年と見立てて、「モンローの伝記下訳五万円」とやった。

陳 これはおもしろいよ。

丸谷 そうしたらね、悪評噴噴でしてね。でも、悪評する人であればあるほどおもしろがる(笑)。僕はあの時に俳諧師であるよりも司会者みたいな気持ちで、ここてみんなを笑わせよう、気楽にしよう、座をしようと思つてつけたんです。後で考えてみるとそれこそが俳諧師の精神だった。

赤尾 そうですね。結局そうですよ、座をもつてのは俳諧師最高の精神ですよ。このごろ忙しくて文人句会もなかなかできませんね。

陳 またやりましょうか。

赤尾 関東に対して西も歌仙まきまきよか。

丸谷 陳さん、ぜったい歌仙を巻きなさい(笑)。というのはつまり、歌仙まくと、小説家は優位に立てるんです(笑)。ことに恋の句になると俳人はダメなんです。派手な恋の句なんてつくれない。ところが、小説家は憶面もなしに恋の句が詠めるんですよ(笑)。これは不思議なものでして、日本小説の伝統のせいでしょうかね。何か憶面もなくねベッドシーンなんか詠めるんですよ。まして陳さんにはもう一つの憶面もない小説、「金瓶梅」や「覚悟憚」の伝統があるんだから(笑)。

赤尾 ところで歌仙の発句作ってきたんですよ。丸谷才一さんの名前を読み込んで。

丸谷 ほう。

赤尾 だから受けていただかないと。「才一という旅人

とあり小六月」としますか「才一」という旅人迎え小六月」としますか。

丸谷 それはちよつと僕、気に入らないですね。申し訳ないですけど、才一じゃなくて面影付にしましょうよ。「大声の旅人迎え……」というようなのもいいでしょ。

赤尾 じゃ発句は「大声の旅人迎え神無月」。あと、つけてください。

丸谷 ちよつと考えさせて下さい（笑）。



酔うほどに連句に熱が入っていく

赤尾 神無月より小六月の方がおもしろいですか。

丸谷 神無月と旅人との関係はおもしろいけど、小六月って言葉、きれいですね。

赤尾 小六月ってのは小春日和といっしょで、始めは「小春かな」ってしようと思っただけけど、小六月でないとしまらない。

丸谷 きれいですね。この旅人が僕じゃないみたいにかきれいですね（笑）。

陳 大声の……ってのは「タイジヨウの……」って読んだ方がいいみたいです。

丸谷 それがいい。俳諧学者としての陳さんの立場を認めよう（笑）。「牛を食って秋におくるる」ってのはいいかですか。私の号は、西亭なんですけど、サイテイと読む人がいるんですよ（笑）。セイテイって読んでくれと頼むんですけどね。

赤尾 牛と秋の声とがよく響いてる。ところが、次の私のうけは「寄る三人に肉も霜降る」って考えてたんですよ。肉が出てくるのでこれはストップ。

丸谷 お考えなさいよ（笑）。僕だって考えたんだから。赤尾 連句は厳しい。肉が出せなくなっちゃった。

丸谷 「その句、手帳なり」ってのが芭蕉にありますね。

芭蕉の弟子たちも、ここで出そうと思って手帳にメモってるんですね。そのくらのカンニングは考えますよね。すると芭蕉は「その句、手帳なり」って見破った（笑）。

赤尾 「秋におくるる」か。つらいなあ（笑）。

丸谷 名詞止めにしたいなって気があったけど、赤尾さんの名詞止めだからな。

編集部 丸谷先生、連歌ってのは待ったなしですか。

丸谷 考えている間にいろんな話をすれば待ったになるんですよ。おもしろい話をして喜ばせてれば。

編集部 前の句を訂正させることはできるんですか。

丸谷 もつともだと納得させる理由さえつけばできます。連歌のルールは一つしかない。宗匠をたてることなんです。つまりとっても政治的なもんなんです。もうこの総理大臣はダメだと思うまでは新聞は総理大臣をたてるでしょ。だから新聞読んできるとまだ三木内閣は続きそうですね。それですよ。

赤尾 「木の葉髪 寄る三人に鶴渡る」。ちよつと字余りですが。

丸谷 いや、なかなかいい句ですね。現代俳句と江戸俳諧のちよつと間ぐらいですね（笑）。

この後、連句は場所を変えて次のように続く。

大声の旅人迎ふ小六月

兜子

牛をくらって秋におくるる

西亭

木の葉髪寄る三人に鶴渡る

兜子

夜もすがらなる牌のざわざわ

西亭

春月に杯おかぬ李白ぶり

西亭

杜甫のそそぎしぬくき泪か

兜子

恋文のはごで風呂たく彼岸過

西亭

(酔がまわるにつれて)

塀の外にて睦める異人

兜子

木枯に猫のちぢめる日向かな

兜子

票のゆくへに悩む半日

西亭

春の閑勾ひかぎ合ふ裾袂

兜子

花の下なる猫のくらやみ

西亭

唇塗るなかれ朧のなかに乙女立つ

兜子

和尚無学で経だけはよむ

西亭

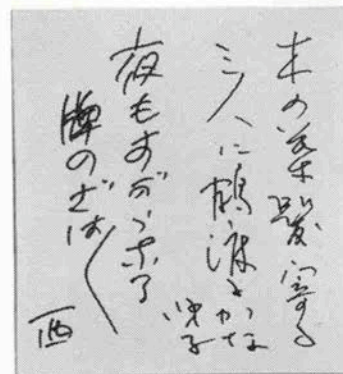
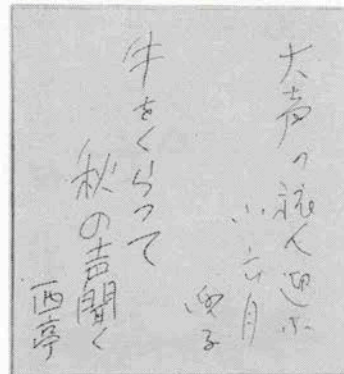
はとときす養子になって五十年

西亭

翁は秋の影によりめく

兜子

ハムーンライトにて▽



●伊東式の〈立体裁断〉

4月生募集

アトリエ戸塚と 戸塚敏衣服研究所が

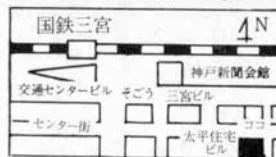
新しい装いのビルで〈太平住宅ビル4F〉
1977年の春を迎えました。



高等科の実技風景

- 基礎コース
- プロデザイナーコース
- 奥さまコース
- 製図専科

所長 / 戸塚 敏



〒651 神戸市灘区御幸通6ノ1ノ22太平住宅ビル4F ☎221-6268
251-2355



き
もの
と
細
貨

おんがら屋

神戸

本部・仕入部 神戸市東灘区青木五丁目一五〇一五二九〇（代）
市街地改造により工事中 昭和五十二年未定
さんちか店 神戸市生田区三宮町一丁目一 電話〇七八・三三二一七〇〇

東京

銀座コア店 東京都中央区銀座五丁目八二〇 電話〇三・五七三・五二九八（代）
（四階きものコア）
渋谷東急店 東京都渋谷区道玄坂一丁目二四一 電話〇三・四七七・三四〇九（直）
（五階和装名家街）
日本橋東急店 東京都中央区日本橋通一丁目九二 電話〇三・二二一・〇五一（代）
（四階和装名家街）
池袋バルコ店 東京都豊島区南池袋一丁目二八二 電話〇三・九八七・〇五六一（直）
（四階きもの小路）